

12
世界
10x20ⁿ + 100
30枚

第九回、第十回バグワッショ会議に出席して
日本学術会議 原力委員、原子核委員会
経済会議 一九六二、三、六、学術会議(経済委員)にて
湯川秀樹

~~第九回~~五年前に第一回のささやか会合を力
ナダの片田舎の漁村で開いた。バグワッショ会議
は、今年で第九回目、第十回目の会議を持つ
運びとなりました。そして私が学術会議の代
表として、しかし同時に個人の資格で、北条の
会議に出席しようとしたので、その様子をお話し
にしたいと思っております。

の主題

第九回の方は「軍縮と世界の安全保障」であり
ました。バグワッショ会議の発端となつたラッセル・
ラインシュタイン宣言の中でも、すでに核兵器
の廃棄だけでなく、一般軍縮の必要性に言
及されていますが、一九五五年の苗田ではまだ
現実からほろかに遠い理想でありました。と
ころが、その後の数年間に情勢は急速に変化し
て参りました。特に一九五九年の国連総会で、

(岩波書店原稿用紙)

「ラッセルの報告」の
研究名紙案、かきつけたりとしたり

全面完全軍縮の早期達成への希望が満場一致
で決意されたことと、国際世論の大きな前進
~~に~~ 呼応したものだといえます。そして
一九六〇年にモスクワで開かれた第六回パリ
ウォン・ユン氏は軍縮と世界の安全保障の問題
を正面から取りあげたのであろう。あくも年
の一九六一年にアメリカのストローで開かれた
第八回の会議も同じ主題でした。これはそ
れがリン連アカデミーおなじアメリカアカデ
ミーがホスト―世話級―と取りまことに。

このような一連の集会の第三者が来れた
パグウォッシュ会議でケンブリッジ大学のキース
カレッジで行なわれ、物理学者のモット
はこのカレッジのマスターで、主人役になり、約七
十人の~~科学者~~が集まり、八月二十五日から三十日
までの~~期間~~ 用い建物に泊り、熱心な討議が
つぎつぎに、軍縮問題が決断された。すか
ら、~~これは~~ 上に述べたように、この会議ではすて
た、~~これは~~ 海軍とあり、また米ソ英の~~三~~ 大
の学術の中には、~~核~~ 核兵器に詳しい人たちが
おられた。

シ、タム、ボ、ロ、ソ、ニ、エ
ボ、フ
中田の報告は、これほどである。

(岩波書店原稿用紙)

このように、
のよう、

出席しているから、話は当然、軍艦に
関する今までの政治的交渉は、
背景として、
として、河津のわかれから、
は、
のメンバーである十八回船の中に入っていない
国の学術に、
見れば、
て、
ある、

技術的

球遷り

第二は、すでに
述べた、
が、
この一年間、
は、
を、
である、

第一、
に、
言、
ア、
その中、
の、
「
の、
は、
（岩波書店原稿用紙）
に、

→両海軍の双方にとって

~~海軍の~~

→同じように母艦を保護する

ようにバランスを付けていなければならない

ブラケット砲台はアタリカの搭載もソ連の艦

隊もどちらでもこの鼻に搭載してこれを搭載しな

し、即ちソ連軍の下方に第一増設で外国軍隊

や基地を攻撃すること、西側は不利な状態にある

し、アタリカ艦隊の下方に核兵器を両側が同じハ

ーセンと、必ず段階的に入らすこと、東側にとっ

て不利になるであろうというところ、これは従

来からのブラケットの推定、即ちアタリカ艦は

核兵器の運用とその運用手段に関して、若い艦

隊にあり、ソ連艦は通常兵力の行使に関して

は格別な意味にあるということ、前後する

いする。ブラケットは第五条の精神に合うもの

に、東側は兵器の削減により大きな犠牲を

強いられている、西側は核兵器の削減により大きな

犠牲を拂わなければならない、ここに

対して、右側は海軍が核兵器を保有するは利

益の前段が正しいこと、東側の大きな犠牲

め、と解釈してよいのか、これは

うまい

(岩波書店原稿用紙)

↑
その後は、
この二つの
も、
は、
その
か、
うと

査察の向
か、
うと

か、
うと

この地、
アメリカ

第一回から、
第二回から、
第三回から、
第四回から、
第五回から

第一グループ、
第二グループ、
第三グループ、
第四グループ、
第五グループ

(岩波書店原稿用紙)

たつ
たつ

他のグループが河川が流れて来たに
知りません。長濱の記念に提出された
この報告はついでに河川に
第一のグループの人たちは先ず

即ち削減してやるなら先ず
一輪法でやるのかよという意見に
この委員は抑る部会に
公認してやる。しかし今までも

で河川を利用してまた
地域を研究の結果、河川
最近河川の水質の調査と
一即ち河川の水質を

第二のグループが
しては当然のことから
岸に水が流れて来る。今
中国からの水質がなかつ
で調査すること。この
河川の調査は、

河川の調査は、
河川の調査は、
河川の調査は、

河川の調査は、
河川の調査は、
河川の調査は、

河川の調査は、

(右) 波書店原稿用紙

河川の調査

河川の調査



その頃は
ハルビンに
く高者
ありう
第七回
ありう

おまじ
ありう

域の中を紀元は、
しつある回にの
やうなひむし
光の世界的中心
字のこ工念
展すすへ
おまじ
ーラント、
ハルビン、
念、その
え、ハ
核生
がある、
であつた
次の
こ、
意に入
はつ
いる
研

(岩波書店原稿用紙)

湯川先生宛へ 平和的

す。戦争目的の武装を廃すための人員や機材の備
を平和目的に転用することは、もしも

一、需要供給の均衡を維持し、経済が停滞

二、浮遊無業の集中して、地域での転機

を導く。示唆せ、他地域の地域へ移る人

ちの援助の方策が実施され

三、個人の技能が平和事業に不向きに陥り

社会に転ずる再訓練の施設が整備され

か、できる限りはつて

若の若手が満ちるなら、同様に行動される。そ

おる、一九五
五十五年
の満洲の

して、二枚の紙を折り、国家の政策があらわ
それらに満ちてくる。過去の事例を参考として

世帯大戦後の影響解消の機会があるから、い

る。物に科する者、執行者が平和目的に策定す

る方は、戦後、いくつもあり、そして、そ

の方の動きは、非常な大規模な強調された

また、国際貿易や発展の一つある国々の援助は、

平和に近づかせることである。

(12) 平和に近づかせることである。

平和に近づかせることである。

（岩波書店原稿用紙）

の備に

後つて、この感嘆がいわいのないものであることは、
科学的に明らかなること、極めて有名なものである。
宇伽は純粋的経験に求むるべく、二年のいし田
筆が實現されると、このグループの報告は断言
して、この感嘆に心強きことである。それこそ、
いうことを一瞬に感嘆させることが、まじりなきに
要諦目になつてくる。

以上がケンブリッジ會議で述べられた宇伽の概
要である。整理して、具體的には大して用紙らし
いことと、~~ありあつた~~、この宇宙の成程に感嘆
を述べたことは著者であり、しかし、もう少
し長い目で見る、大きな視野に立つて見ると、
判断は必ずしも違つてきます。私の印象はまじ
りあつた

(13)
一、少なうとも大團の種々の間では、全面究
全宇伽は實現可能であり、それに因力する
のが、むしろある種の経験と考へようとしても、
ちなむて、この感嘆、何と云つても、感嘆に大い
き、そして、感嘆に感嘆である。五筆向
には、全く整理されなかつたことである。

立入った討論

に活発に考
考し、

ケンブリッジ時代の流がたかくなるとい
 流にロンドン會議及び第十回バグワットの會議
 の流に終ることになりました。私は嘗て今度の
 第九回第十回にはござることほら他の人たちに
 出て頂きたいと思つていました。その理由は一
 つは、富強問題について、私の準備知識があ
 りにも、富強にといふこと、~~は~~ 富強。もう一つ
 の理由は、バグワットの運動が現任のうら
 ちまで進展してきて居ますと、ある 流 が て ま い は す と
 う見るとある種の 流 が て ま い は す と
 一 流 の 頃 の う に、この運動に対するモウ
 ル甘ボルトといふが、精神的な指の 中 高 性 が
 少なく、い は た に 異 色 の 提 案 が あ る う
 人の出席がより必要にほつてまう。その
 いう意味では私は高橋君といふことをよく知つ
 ていたのではありません。
 と、い は た が 淺 い の 期 が あ ら せ ま つ て ま う た ら
 第十回會議は、う ら せん ア イ ン シ ン グ ラ ウ ン の 遺 言
 を 再 確 認 さ る た と は な ら ず に い は す た ら ば は は
 それに出席すべきおの義務があることが

(15)

(岩波書店原稿用紙)

93
 93
 (16)
 103
 3
 ユーロ (三)

十 註 出 席 者 数 国 数
 オーストラリア (三) オーストリア (四)
 ブラジル (二) ブルガリア (一) カナダ (三) 中国 (二)

チェコスロバキヤ (六) デンマーク (三) フランス (十二)

ガーナ (二) ドイツ (九) ギリシャ (二) ハンガリー (三)

アイスランド (一) インド (四) アイルランド (一) イスラエル (三)

イタリア (四) 日本 (三) レバノン (二) マラヤ (一)

オランダ (五) ニュージーランド (二) ナイジェリア (一)

ノルウェー (三) パキスタン (一) ポーランド (五)

ルルトガル (一) ルーマニア (三) 南アフリカ (一)

スペイン (一) スエーデン (三) スイス (二) アラブ連合 (二)

イギリス (三) アナリカ (四) ソ連 (二)

ニテ (四) 百九十九名
 五名
 二十九名
 ゲスト

三十一名

(岩波書店原稿用紙)

その意味で
ロンドン合意の
そのがゆな開
のしるべきが
あるべきを
強調し

墨田 かく
肉を煮て入れられたように見受けられまし
た。この最後の早と遅をいって見れば
一昨の午後はいくつかの国のブレイド海防機
の報告がありました。私は東部報告を念紙の
ことと申し、大田中心にどうするかはいま
は取柄う南極が狭く取られすぎはいらうとい
う旨を記述してました。

第二田は北にありながら北の問題は
社会における研究者の地位

「研究者と世界の安全関係」

「研究者における国際協力」

「研究しつつある国の協定における研究

者と研究者」

「今後の組織に関する一助の試案」

等でありました。しかし私はケンブリッジから

ロンドンへ帰るに早急、風邪をひいて、少し熱

があり、せきが出たり、頭痛がしたりして、

(21) 第一日は無理をしないで済まして、しかしその後の日は

病気が悪くなる一方だったので、第二日は

(岩波書店原稿用紙)

(23)

ホリズに紙辯してモウイヤシレ。

また中国州遊がバグめオアレスでホとかイ致

法せれがちで日在、オ、リ、ン、一、グ、に、何、つ、ま、は、物、に、謝

心、事、で、其、す、の、二、つ、に、其、が、こ、れ、に、つ、い、て、一、席

や、り、き、し、じ、の、ほ、か、は、も、バ、リ、ウ、オ、ツ、し、又、で、は、致、進

されて、る、所、遊、が、い、く、つ、と、あ、り、ま、す、が、中、国、内

遊、の、原、籍、の、遊、者、に、も、直、接、何、の、し、ま、す、の、と、い、つ、ま

でも、何、つ、ま、お、く、と、も、な、い、ま、わ、の、答、で、あ、る。

この、念、は、其、故、に、認、明、を、出、す、と、い、は、な、つ、て、お

り、す、し、じ、

い、か、に、お、つ、か、し、く、ら、い、